

奥尻町のあゆみ

明治以前のできごと

西暦	年号	奥尻町のできごと
1454	享徳 3	8月28日、武田信広(松前家の祖)主従が、南部大畑(大利浜)より上ノ国に向う途中難船し、本島に漂着。
1469	文明元	6月5日、若狭の僧随芳が草庵を本島に建立。
1490	延徳 2	僧随芳、大館に移る。
1529	享祿 2	このころ毎年冬期から春鯨漁期まで、アイヌがオットセイ漁に本島へ出稼ぎに来る。
1555	弘治元	7月、上杉謙信の臣宇田遠江守師長が、川中島の戦より落ち延びて従者3名と蝦夷地渡来の途中、本島に漂着。
1617	元和 3	5月、松前山法源寺第4世芳龍が、本島の現在の青苗地区に空谷大仙寺を建立。
1640	寛永 17	駒ヶ岳の噴火・火山灰の降灰(これにより一時期無人化となったといわれる)
1667	寛文 7	空谷山大仙寺が松前城下蔵町に移される。
1689	元祿 2	2月14日、松山定奉行明石豊左衛門尚政が西部遠己之利島を賜わり、本島を統治する。
1704	宝永元	3月18日、越前丹生郡府中の僧正光空念が松前に渡り、松前法幢寺をはじめ各地の神社仏閣に観音経一軸と普門品一卷を納め、さらに本島その他の山嶽に登り諸神を勧請。
1705	宝永 2	4月1日、酒田獺師町船頭三太郎水主と67人が、材木積み取り航行中に大暴風に遭い難船し、解船で本島に漂着して漁師甚九郎に救助される。
1720	享保 5	新井白石「蝦夷志」を著す。本島に関する記事及び附図に「奥尻」の文字をあて、郡村名共に現在にいたる。
1723	享保 8	空谷山大仙寺が上磯郡泉沢村に再遷し、奥尻山大仙寺と改称。
1724	享保 9	春、神威山が噴火し、島内南部に多くの被害があったようである。
1738	元文 3	江戸留守居役の河合垣右衛門が本島を統治する。
1741	寛保元	7月、松前大島が噴火し、本島に降灰。
1767	明和 4	亀田郡小安井村釜石より田口久兵衛が移住。
1778	安永 7	「松前随商録」に安永年間の産物、知行主、差荷料、小字名など記された。
1783	天明 3	10月1日から翌年4月まで、江差の名主であった村山弥惣兵衛経営下のヲコジリ島の開発を、滞在中の平秩東作が約束。
1784	天明 4	「蝦夷道知辺」に本島に関する記述あり。
1786	天明 6	「蝦夷拾遺」「西蝦夷地場所」などに本島に関する記述あり。

1789	寛政元	7月、福山町小松前喜蔵水主ら6人が、石狩にアキアジを買い付けに行く途中、奥尻島沖で遭難。
1790	寛政2	4月27日、菅江真澄が「蝦夷喧辞弁」に、江差より本島を望んだことを記した。8月7日、藩船海徳丸船頭水主ら6人が本島沖で遭難。
1793	寛政5	関子教著「蝦夷風土記」に「奥殻失栗島」として本島の方位が記された。
1796	寛政8	「蝦夷地島々不残」に「ヲコシリ島」の小字名、里程、地形、産物などが記される。
1801	享和元	村上島之丞著「蝦夷島奇観」にヲコシリ島でのオットセイ捕獲の記述あり。
1805	文化2	5月4日、露艦ナデシュタ号が、本島8マイルに接近して経緯度などを測量。
1809	文化6	「蝦夷地名解」に本島の字別に地形、産物が記される。
1818	文政元	場所請負人が河内屋小兵衛となる。
1819	文政2	澳津神社が弁天岬に建立。江差詰調役松田伝十郎が鎮台の命により本島でオットセイ1頭を捕獲させ、幕府に献上。
1823	文政6	場所請負人が熊石村佐野権次郎となる。
1827	文政10	佐野権次郎が請負の向こう5カ年を追願。文政年間における漁況が1万石内外であった。
1831	天保2	言代主神社を青苗に創立。
1833	天保4	秋、遠島刑の豊吉が本島を脱走し、翌年箱館で捕らえられる。
1838	天保9	場所請負人が松前荒谷新左衛門となる。
1842	天保13	「西蝦夷分間」に「奥尻島」の地名、方位、地形、産物が記される。
1843	天保14	松前荒谷新左衛門が請負季明となる。
1845	弘化2	松浦武四郎が東蝦夷地探査の途中、本島に来る。
1847	弘化4	頼三樹三郎が江差で奥尻島遠望の詩を詠む。
1850	嘉永3	江差の名主梁瀬仁右衛門存受が奥尻島巡視の帰途に発病し、翌年に死去。
1851	嘉永4	場所請負人が福山町の荒谷新左衛門となる。
1854	安政元	横井豊山著「探夷録」5月12日の項に本島の記述あり。流罪人伊七が釈放され、瀬田内で地蔵堂守となった。幕府の箱館奉行設置により、本島がその所轄となる。
1856	安政3	奥尻島詰同心定役代に太田正之助が就任。奥尻島が永住人3戸、男9人、女6人の計15人であった。阿部喜任著「蝦夷行程記」に、「奥子利周り十四里運上屋有オットセイの魚場也 熊石又クトウも使船有風5里」記述あり。
1859	安政6	8月8日、アメリカ商船スプリング号が室津島に座礁し、乗組員が同島に上陸。原口村与太郎と熊石村藤太郎が薬師村に移住。安政年間、幕府が釣懸村字東風泊に番所を設け、青苗村にオットセイ奉行を置いた。

1860	万延元	2月、本島の海産物・干鮑（ほシアワビ）、エリコ（ナマコのクチコ・コノワタ）が自由販売となった。奥尻島が永住人6戸、男15人、女13人の計28人であった。
1861	文久元	12月、東西蝦夷地場所の請負季明に伴い、向こう7カ年追願許可の恩典に5カ年間米34俵の献納が必要となり、本島請負人荒谷新左衛門の割当米が9俵であった。この年から奥尻島のニシン漁に建網を使用。
1862	文久2	秋田大川村から清助、常吉が薬師村に移住。
1864	元治元	秋田大川村の子之助と松前唐津内町の藤左衛門が薬師村に移住。箱館奉行が、臼別場所の罪人と江戸からの遠島者10人を新設の釣懸流刑所に移した。奥尻島が永住人13戸、男30人、女23人の計53人であった。
1865	慶応元	流罪人の漁業と運送業従事者に、殖産興業の資金が補助される。
1866	慶応2	箱館奉行所杉浦兵庫頭により、本島流刑者の件につき江戸表へ伺い書が提出。